

衛藤のこと

◆はじめに

長年、自分の苗字「衛藤（えとう、新字では衛藤）」について記載してある資料を探し続けている。出身地の大分県ではごく一般的な苗字だが、高校を卒業して東京に出ると、一度で「えとう」と読んでもらえることは少なかった。「えいどう」や「えいとう」と読む人はまだしも、「衛」の左側の行人偏だけを見て「ごとう（後藤）」と読む人もいた。宅配便を届けに来た人が玄関先で送り状の宛名を見て「あの……」と言ったきり絶句してしまうのは、いつものことだ。そんな経験から、自分が生まれた時から背負っている苗字の由来について関心を抱くようになっていた。

それとは別に長い間、頭の隅に引っかかっていることがある。小学校六年生の時に転校して行った友達が、別れの記念にと日本の城に関する本をくれた。文庫本ほどの大きさのハンドブックだった。巻末に戦国時代の城砦を記した一覧表があり、大分県の中に「大白谷、衛藤蔵人」とあったのを覚えている。「大白谷」とは実家から車で三十分ほどの山深い土地だ。歴史に関する物語などが好きで、学校の図書館にあった子供向けの平家物語、源平盛衰記などを暗記するほど繰り返し読んでいたため、自分と同じ苗字を持つ人物が「城持ち」だったことを知って大いに興味を持った。そういうことも相俟って、二十代後半のころから、故郷の歴史や苗字などに関する文献を探し続けてきた。

調べものが一気に進展する機会となったのが、大分県立図書館で「藤原姓衛藤氏系図」（以下、衛藤系図）を見たことだった。それが衛藤の苗字にまつわる歴史を紐解く大きな助けとなった。

衛藤系図の家は、私の出身地である大分県の南西部に位置する豊後大野市三重町大白谷妙見に居住した。私の先祖である可能性が高いとは思われるが、まだそれを確かめられてはいない。また、大分県には広範に衛藤の苗字が存在するが、そのすべてがこの衛藤系図の家から発したとは思えず、いくつもの分流の一つに過ぎないと思っている。

さらに、全国では千位以内にも入らない少ない苗字であるのに、大分では十五位、豊後大野市では三位となるほど局地的に集住していることの疑問も解消できたわけではない。

以下、衛藤系図を経系に、これまで収集してきた「衛藤」を緯糸にしてまとめてみる。資料の読み違いや思い込みに基づく誤解もあることと思うが、衛藤の苗字についてさらなる資料、あるいは御指摘や御批判を求めるために、あえて公表に踏み切る。

年代順が基本だが、多少は年代を前後したり、脇道にそれたりすることを、あらかじめお断わりしておく。

◆藤原姓衛藤氏系図

「○藤」（○○とう）の形を取る苗字は、俗に「十六藤（じゅうろく・とう）」、あるいは「三十二藤（さんじゅうに・とう）」などといわれ、様々な種類がある。その多くは、藤原の血を引く人物が派遣された任地や、携わった役職名にちなんで名乗るようになったといわれている。

地名にちなむものとしては、「安房国（あわのくに）」の安藤（あんどう、奥州・安倍氏が称したとの説もある）、「伊勢国（いせのくに）」の伊藤（いとう、伊豆にちなむという説もある）、「遠江国（とおとうみのくに）」の遠藤（えんどう）、「加賀国（かがのくに）」の加藤（かとう）、「近江国（おうみのくに）」の近藤（こんどう）、「尾張国（おわりのくに）」の尾藤（びとう）、「武蔵国（むさしのくに）」の武藤（むとう、役所の「武者所・むしゃどころ」にちなむとの説も）などが挙げられる。

また、役職名にちなむものとしては、「木工助（もくのすけ）」の工藤（くどう）、「斎宮頭（さいくうのかみ）」の斎藤（さいとう）、「左衛門尉（さえもんのじょう）」の佐藤（さとう、下野国佐野庄や佐渡にちなむとの説もある）、「内舎人（うどねり）」の内藤（ないとう）、「兵部省（ひょうぶしょう）」の兵藤（ひょうどう）などがある。

衛藤と同じ「えとう」の読みを持つ「江藤」は、「藤原」と「大江」が縁戚となったことにちなむという。そのほか桓武平氏の流れをくむ千葉氏で肥前国の名族として知られる江藤もある。ただし、大分南部に多い「江藤」は、衛藤を改めたものだといわれる。その他に「恵藤」と書いて「えとう」と読ませる苗字もあって、やはり大分にみられる。これは「衛」の漢音が「ウェイ」であることから、音の近い「ゑ」の字母である「恵」の字を当てたと思われ、やはり「衛藤」から分かれたのではないかと、私は推測している。

大分県立図書館に衛藤系図があることは、日本の苗字について研究をしている人に、衛藤の由来を問い合わせた。県立図書館で閲覧を申請してみると、職員が探し出してくれた系図は二種類あった。一つは手書きによるもの（以下、「書写本」という）で、もう一つは『大分県郷土史料集成 系図篇 戦記篇（一）』に収められていた（以下、「活字本」という）。書写本を基に活字化されたものだろう。江戸末期に大分郡に居住した市井の学者、後藤碩田（ごとう・せきでん、1805—1882年）が収集した資料であるらしく、「本系図は碩田叢史本に拠（よ）れり」とされている。書写本にも活字本にも、どの家に伝わったものかであるのかについては明示されていない。

書写本と活字本には、いくつか相違がある。写し間違いなのか、別の資料を反映させているのか分からないが、以下の分析の中でその都度紹介したい。

系図の始まりは、藤原氏であるからやはり鎌足（かまたり）である。

鎌足——不比等（ふひと、贈太政大臣）——房前（ふささき、贈太政大臣）——眞楯（またて、号長岡大臣、贈太政大臣）——内麿（うちまろ、後に号長岡大臣、贈太政大臣）——冬嗣（ふゆつぐ、正一位、右大臣、贈太政大臣）——良門（よしかど、内舎人、正六位上）——利基（としもと、右中將、従四位下、昌泰三年 [900] 十月二日薨）——兼輔（かねすけ、歌人、右中將、参議、五位蔵人、従三位、中納言、承平三年 [933] 二月十八日薨）——雅正（まさただ、周防豊前守、刑部大輔、従五位下、歌人）——為長（ためなが、従五位下、陸奥守）——頼経（よりつね、正五位下、出雲甲斐等守）——泰季（やすすえ、二條殿）——頼綱（よりつな、五位上）——義経（よしつね、五位下。源九郎判官義経とは別人）——仲頼（なかより、従五位下、左衛門佐、衛府士宮氏、藤氏、藤取、衛藤ト云）。

後に全盛期を誇った藤原道長につながる藤原北家の流れから途中で別れる「良門流（よしかど・りゅう）」に位置づけられる。

この中で、太政大臣などを除いて、よく知られた人物を挙げるなら、三十六歌仙の一人、参議兼輔（さんぎ・かねすけ）がいる。京都・賀茂川堤の近くに屋敷があったことから堤中納言（つつみ・ちゅうなごん）とも呼ばれた。従兄弟で妻の父でもある三条右大臣藤原定方（さんじょう・うだいじん・ふじわら・さだかた）とともに、当時の歌壇の中心的な人物だったとされ、小倉百人一首にも「二七番 中納言兼輔」として「みかの原 わきてながるる 泉川 いつみきとてか こひしかるらむ」の歌が収められている。

雅正の長男で為長の兄にあたる太皇太后宮亮為頼（たいこうたいごうのみやのすけ・ためより）は歌人、為長の弟の為時（ためとき）も歌人であり、その娘は『源氏物語』の作者、紫式部である。

◆初代衛藤

衛藤系図によると、義経の子に仲頼（なかより）という人物がいる。衛藤系図の書写本の添え書き（以下、割書きという）には「従五位下、左衛門佐（さえものすけ）。衛府（えふ）士宮氏。藤氏の藤を取り衛藤と云う」とあり、これが初代衛藤だということになる。

衛府とは、古代において宮城の警備、天皇の行幸の供奉などに当たった官司で、律令制下では「衛門府（えもんふ）」、「左衛士府（さえじふ）」と「右衛士府（うえじふ）」、「左兵

衛府（さひょうえふ）」と「右兵衛府（うひょうえふ）」の「五衛府」があった。

『有職故実』（ゆうそくこじつ、石村貞吉著、嵐義人校訂、講談社学術文庫）によると、組織は何度か改変され、平安時代初期の弘仁二年[811]以後、「左衛門府」（さえもんふ）と「右衛門府」（うえもんふ）、「左近衛府（さこのえふ）」と「右近衛府（うこのえふ）」、「左兵衛府（さひょうえふ）」と「右兵衛府（うひょうえふ）」の「六衛府（りくえふ）の制」が整えられた。六衛府のそれぞれの長官は「衛府督（えふのかみ）」と総称される。左右の近衛大将、左右の兵衛督（ひょうえのかみ）、左右の衛門督（えもんのかみ）をいう。また次官は「衛府佐（えふのすけ）」で、左右の近衛「中将（ちゅうじょう）」・「少将（しょうしょう）」、左右の「兵衛佐（ひょうえのすけ）」、左右の「衛門佐（えもんのすけ）」である。

活字本の割書きは、仲頼の職を「左右衛門佐」としている。よく見ると「右」の字に小さく横線を引いてある。誤りということらしい。書写本は「左衛門佐」であるので、「左衛門府の次官」だった時に「衛藤」を名乗ったということになる。

この系図の真偽についてあれこれと言えるだけの根拠を、私は持ち合わせてはいない。しかし、「衛藤」が「えいとう」や「えいどう」ではなく「えとう」であることの理由として「衛府（えふ）」にちなんだとするのは、すたとんと腑に落ちたような気がした。

◆衛藤と鎌倉

さて、藤原仲頼が初代となった衛藤の家の系図は、次のように続く。

仲頼——長舜（ちょうしゅん、山僧、常陸坊阿闍梨、活字本では「長寂」）——道念（どうねん、従五位下。衛藤三。豊前守）——直道（なおみち、次右衛門尉）——長道（ながみち、衛藤太郎）——眞道（まさみち、右衛門尉）——眞仲（まさなか、衛藤六郎）——重國（しげくに、太郎、左衛門尉）——繁綱（しげつな、次郎）——則耀（のりてる、小源太）——重久（しげひさ、右中太）——為清（ためきよ、平五）——為助（ためすけ、三郎）——為吉（ためよし、四郎三）——安家（やすいえ、五郎）——行秀（ゆきひで、八三治）——信眞（のぶまさ、丹後守）——友長（ともなが、二郎）——國家（くにいえ、童名豊壽丸後刑部太輔、建久六卯年[1195]能直公豊後豊前之守護御下向時、被隨身下向、生年十八歳）

都で衛府の職にあった家は、例えば平将門（たいら・まさかど）や藤原純友（ふじわら・すみとも）の乱（承平・天慶の乱、承平五年[935]～天慶三年[940]）、京都を二分した保元の乱（保元元年[1156]）、平治の乱（平治元年[1159]）などの動乱時に、どう身を処して生き抜いたのだろうか。また、どういう経緯で源頼朝に仕えることになり、源平の戦に

はどう関わったのだろうか。

そのあたりのことを知りたいと思い、「衛藤」の二文字を求めて、『保元物語』や『平治物語』『平家物語』『源平盛衰記』『源平闘諍録』『義経記』『承久記』『太平記』といった軍記物、さらには鎌倉幕府の公文書である『吾妻鏡（あずまかがみ）』なども通読してみた。しかし、今のところ「衛藤」の名を見つけられていない。

『列島を翔ける平安武士 九州・京都・東国』（野口実著、吉川弘文館歴史文化ライブラリ 446）には「鎌倉幕府成立の当初、頼朝はその縁故関係をフルに活用して京都から有能な吏僚や武士をスカウトしている（略）」とある。『北条氏の時代』（本郷和人、文春新書）も頼朝が人材を必要とした事情に触れている。年代はやや下がるが、後鳥羽上皇が幕府執権の北条義時を討伐する兵を挙げた「承久の乱」（承久三年[1221]）の際のことだ。「京都に攻め上った幕府軍の『勇士五千余人』がほとんど誰も朝廷から与えられた『院宣』が読めなかった（略）」。当時でさえこの有り様だから、鎌倉幕府が始まったとされる文治元年[1185]の当時の坂東武者たちの無筆ぶりは推して知るべしだろう。同書は「文字を書ける人がほとんどいないのですから、朝廷の政治で使われているような格式高い文書が書ける人は、関東のどこを探してもほとんど見つからないと考えた方がいいでしょう。結局京都から連れてくるしかなかったのです」と指摘している。

草創期の幕府を文官として支えた中原親能（なかはら・ちかよし、康治二年[1143]—承元二年[1209]）、その弟（甥とも）の大江広元（おおえ・ひろもと、久安四年[1148]—嘉禄元年[1225]）、頼朝の乳母の甥である三善康信（みよし・やすのぶ、保延[1140]—承久三年[1221]）は、いずれも朝廷の下級貴族だった。中原は藤原姓で、初代の豊後守護となった大友能直（おおとも・よしなお、承安二年[1172]—貞応二年[1223]）の養父とされる。中原について同書は「彼は明経道（儒学）を司った下級貴族の出身でした（略）以前から頼朝とは知り合いだったようで、挙兵から時を置かずして家来に加わっています。京都にいても下級貴族では大した出世は望めない。そこで頼朝からのスカウト話に乗り（略）頼朝のもとに飛び込んだと考えられます」と記している。

衛藤と鎌倉の関係も、そうした中で始まったものなのかも知れない。

京都には衛藤の痕跡が残っていた。それは、元応元年[1319]の東寺（教王護国寺）の年貢帳に記されているという京都の「衛藤跡」である。年貢帳の実物を確認しているわけではないが、京都考古資料館の上村和直氏による論文「京都『八条院町』をめぐる諸問題～出土漆器を中心として～」の中に記載されていた。それによると、「衛藤跡」は屋敷跡とみられ、その場所は平安京の南東部に位置する左京八条三坊十四町の南東隅にあたる。現在のJ R京都駅北口から東に徒歩わずか一、二分の場所で、東洞院通と梅小路が交差する地点に面している。

年貢帳の当時は、屋敷跡は既に小さな町屋に分割されていた。時は後醍醐天皇の御世で、鎌倉末期から南北朝初期にあたる。衛藤の屋敷があった場所が「衛藤跡」といわれて通用するのは、屋敷がなくなってどれぐらいの年月だろうか。屋敷が存在した期間が長ければ長いほど、人々に長く記憶されることだろうと思われる。

◆衛藤系図への疑念

系図には偽作の疑いがつきものと言って良い。昔は自己の経歴を飾るために、源平藤橘（げん・ぺい・とう・きつ＝源氏、平氏、藤原、橘・たちばな）のどれかの姓にあやかろうとして、家系図を偽造することが多かったといわれる。「今、藤が付く名字で、遡ると藤原氏につながるという家はまずないと思った方が良い」と指摘する研究者もいるほどだ。

また、武門にある者は、藤原であれば十世紀前半の武将で鎮守府将軍の藤原利仁（ふじわら・としひと、りじん）、あるいは十世紀の地方武士で平将門（たいらの・まさかど）を討ち取った藤原秀郷（ふじわら・ひでさと、倭藤太）につながる系図を作ることが多かったといわれる。

衛藤系図の場合、著名な武人を祖とはしていないが、もし系図の作者にそうした意図があったとすれば、著名な歌人につながることを選んだのかもしれない。

『佐伯史談』に「佐伯地方の姓氏」を連載した佐脇貫一氏（故人）は、『尊卑分脈』（そんぴぶんみやく）に照らして衛藤系図の疑問点を指摘している。

佐脇氏はまず、佐伯地方を中心に大分県内に広く分布する「江藤」について、「衛藤」を書き換えたという伝承が地元にあること、「江藤」の「寛政系図」に「藤原氏支流で宗親（むねちか）の後」となっていることに着目する。『尊卑分脈』で「宗親」を探した結果、利仁流藤原氏で河合権守齊藤助宗（かわい・ごんのかみ・さいとう・すけむね）の子右衛門宗景（うえもん・むねかげ）の三男右馬允宗親（うまのじょう・むねちか）、後に右衛門宗長（うえもん・むねなが）と改めた人物であろうと推定している。建久 [1190～1199] から承久年間 [1219～1222] ごろまでの人物で、その孫である右衛門尉宗利（うえもんのじょう・むねとし）が「衛藤」を称したという。ただし、衛藤系図の中には「宗親」も「宗利」も見当たらない。「江藤」の「寛政系図」に依拠した佐脇氏は、それと相違する衛藤系図に「信用をおけない」としている。

建久年間 [1190～1199] から承久年間 [1219～1222] に生きた人物の孫であれば、鎌倉時代中期の人物であり、後に触れる豊後国守護の大友家の豊後下向（衛藤系図によれば建久六年[1195]）とは時期がずれる。大友家の当主として初めて豊後に土着したとされる三代目の頼泰（よりやす）の下向時に隨身した可能性はあるが、そうした文献の類を見いだ

せていない。頼泰の下向についても、蒙古襲来の危険が高まり九州の守護として防備を固めるために幕府に命じられたとされるが、具体的な下向時期については定かではない。

佐脇氏によれば、『尊卑分脈』では、出雲守、出羽守を歴任した頼経には泰経（やすつね）、頼孝（よしたか）、頼季（よすすえ）、頼信（よりのぶ）の四子があるが、衛藤系図では頼季、泰季の二子しかいない。

衛藤系図の泰季の割書きには職名を「二条殿」としてある。一方、『尊卑分脈』で「二条」の職名があるのは頼経の長子である泰経で、職名は「二条関白勾当」になっている。衛藤系図の泰季は泰経の誤記なのかも知れない。その子の頼綱は伯耆守藤原頼業（ほうきのかみ・ふじわら・よりのなり）の子となって伯耆治部少丞頼綱（ほうき・じぶ・しょうじょう・よりのつな）と称し、伯耆国に住んだ。頼綱には子がなく、清和源氏源満政（みなもとの・みつまさ）の次男である駿河守忠隆（ただたか）の子の義経（よしつね）を養子にしている。佐脇氏は、衛藤氏に清和源氏説があるのはこのためであろうと分析している。佐脇氏は、衛藤系図で義経の次男となっている仲頼（なかより）について、『尊卑分脈』では義経の四男であることを指摘している。

なお、『尊卑分脈』とは、南北朝から室町時代初期にかけて完成した系図集で、洞院公定（とういん・きみさだ）、養子満季（みつすえ）、孫の実熙（さねひろ）が編纂した。ただし、異本が多く、また実在した人物の名前がなかったり、逆に実在が疑われる人名があったりするほか、年代にも疑義があることが指摘されており、全面的に依拠することはできない。

ついでに言えば、佐脇氏が依拠する江藤氏の「寛政系図」自体が江戸時代の寛政年間[1789-1801]に作られたものであって、そこに作為が働いていなかったという保証はない。

佐脇氏は、『尊卑分脈』では、仲頼の子は仲方（なかかた）、行綱（ゆきつな）の二人で、衛藤系図とは異なっていることを指摘している。

衛藤系図の「長舜」（あるいは長寂）の俗名が不明であり、もし衛藤系図が家系を偽っているとすれば、ここなのかも知れない。ともあれ、この系譜に連なる國家が源頼朝に仕え大友家に従って豊後に下向した人物だ。衛藤系図の割書きには「童名豊壽丸（ほうじゅまる）。後に刑部大輔（ぎょうぶだいゆう）と号す。建久六年[1195]、（大友）能直（よしなお）公が豊後・豊前の守護として御下向の時、隨身せられ下向。生年十八歳」とある。

『豊後國志（ぶんごこくし）』という本がある。江戸時代後期、江戸から豊後岡藩に招聘された医師で学者の唐橋世濟（からはし・せいさい、号は君山。元文元年[1736]—寛政十二年[1800]）が、藩主及び幕府の許可を受けて編集し、その没後、弟子で後に南画を大成させた田能村竹田（たのむら・ちくでん、安永六年[1777]—天保六年[1835]）らが校正して完成させた。その後、藩が幕府に献納した。古書店で見つけた本は、昭和六年[1931]

に復刻されたものだ。

同書の「卷之九（大野郡）」に、「衛藤國家（えとう・くにいえ）」という人物の名前が記されている。それには、藤原冬嗣（ふじわら・ふゆつぐ）という人物の十世の孫である左兵衛佐（さひょうえのすけ）仲頼（なかより）が「衛府」の職名にちなんで衛藤を名乗ったこと、その十七代目に当たる刑部大丞（ぎょうぶだいじょう）國家が、右大将家（源頼朝）に仕え、豊後守護に任じられた大友能直（おおとも・よしなお、承安二年[1172]年—貞応二年[1223]）に随行して豊後に下向し、中津留（なかつる、現在の豊後大野市三重町中津留）に居住したことが記されている。

衛藤系図が、初めて「衛藤」を名乗った仲頼を「左衛門佐」としているのに対して、『豊後國志』は「左兵衛佐」としているほか、國家の官途も「刑部大輔」と「刑部大丞」の違いがある。また、衛藤系図は國家の居住地には触れていない。そのほかは概ね一致する。唐橋の存命中に後藤碩田は生まれていないが、唐橋が碩田と同じ系図に接した可能性はある。ただ、わずかながら差異もあることから、衛藤系図のほかにも基とした資料があるのかも知れない。

◆大友十二筋

中央の文献にはまったくといって良いほど登場しない「衛藤」だが、大分では『豊後國志』のほか、いずれも江戸時代になって書かれた『大友記（おおともき）』や『両豊記（りょうほうき）』『豊城世譜（ほうじょうせいふ）』などに散見される。

俗に「大友十二筋」（おおとも・じゅうに・すじ）という言葉がある。これは、大友能直の豊後下向の際に直臣として随った主だった家臣団のことである。佐脇氏によれば、「佐藤」「後藤」「衛藤」「首藤」などがあるという。

この「大友十二筋」について大分県立図書館で調べたところ、2010年に本田耕一氏という人がまとめた『大友家臣団便覧』という文書が見つかった。田部家に伝わる「田部文書」の内の「大友諸氏名鑑」が引用されている。この名鑑は寛政十一年[1799]に唐橋世済が「後藤卯三郎」（ごとう・うさぶろう）という人物の記録を書写したものだとして、同便覧の「改題」に記されている。

「大友諸氏名鑑」の中に、「大友能直下向之供十二筋」という項があり「首藤 衛藤 舞林 高山 甲斐瀬 矢野」という苗字が記されている。この本田氏は首藤の次の苗字を「東藤」と記している。「東藤」という名前が豊後大野市にあるにはあるが、他の文献と照らし合わせても「東藤」ではなく、崩し字の「東」が似る「衛」と読み違えたものと思われる。「舞」と「林」をひとつにして「舞林」とする文献もあるようだが、「舞」、「林」とともに

大分に存在する苗字である。

上記とほぼ同様の内容が、江戸初期に書かれた『豊陽志』（木付春碩著、安住寺所蔵本）にもある。それには「御同紋之家之事」として、次のように書かれている。

古庄党（国東郡田染牧城主） 志賀党（大野郡＝直入郡の誤＝竹田岡城主） 右之外御先祖能直公御下向之御供之筋目は、御家之御紋御赦免也。いわゆる首藤、衛藤、舞、林、高山、甲斐瀬、矢野等割茗荷紋と云、其外御一族御庶子之御家々は御同門（紋の誤りか）也

家紋については本編の末尾に付した別稿「家紋のこと」で詳述した。

この『豊陽志』について、外山幹夫氏は著書『大友宗麟』（日本歴史学会編集、人物叢書、吉川弘文館）で「江戸時代の編纂物に記載されたものであるが、志手文書にみえる天正十一年[1583]の「大友氏部下姓氏付」にみられる記事とも類似し、史料価値はかなり高い」と記している。一方、『大分県史 中世篇1』は「天正十一年」の資料について、大友家の豊後下向から年月が経ち過ぎていることを理由に「にわかには信じ難い」としている。

「甲斐瀬」とは大分でも聞きなれない苗字だ。電話帳を基にした『姓名分布&ランキング』[姓名分布&姓名ランキング 写録宝夢集/名前・苗字・名字 \(nipponsoft.co.jp\)](http://nipponsoft.co.jp)で検索すると「甲斐瀬」は一件も出てこないが、「貝瀬」なら新潟や関東などにあるようだ。しかし、「甲斐」は大分、宮崎に多い苗字であるので、「甲斐」と「瀬」に分けるべきなのかも知れない。「瀬」一文字の苗字を同サイトで検索すると、大分にはないが兵庫県や大阪府などにあるようだ。あるいは、例えば本来は「瀬川」や「瀬尾」といった苗字の一字が欠落した可能性があるかも知れない。しかし、甲斐と瀬を二つに分けたとしても都合八種しかない。

『大分県郷土史料集成 系図篇 戦記篇（一）』にある工藤氏の系図や『豊後國志』には「工藤刑部左衛門祐謚」（くどう・ぎょうぶ・さえもん・すけみち）が、大友能直の豊後下向の際に同行したと記されている。これも「十二筋」の一なのかも知れない。

『両豊記』には、次のような記載がある。

建久七年[1196]丙辰正月十一日、頼朝、（大友）能直（よしなお）を以って豊前豊後の守護職に補し、なお鎮西奉行を兼務せしむ、時に能直年僅かに十九歳なりき、同年三月大（おおい）に旅（りよ）を整え古庄四郎重吉（ふるしょう・しろう・しげよし、重能とも）百余騎を以って先駆（さきがけ）をなし志賀八郎親郷（しが・はちろう・ちかさと）二百余騎にて殿（しんがり）し、能直の本陣は首藤（しゅとう）、衛藤、舞（まい）、高山、甲斐、瀬、矢野、後藤、佐藤、高田等の宗徒の勇士、警固おさおさ怠りなく総勢すぐって千八百余騎を随えて鎌倉を發して豊後に下

向……（以下略）

先の八種の苗字に、工藤、そして『両豊記』にある後藤、佐藤、高田を加えると十二種となるが、それがいわゆる「十二筋」であるのかを裏付ける資料はまだ入手していない。衛藤系図には國家の豊後下向は建久六年[1195]とあり、『両豊記』の記述とは一年の違いがあることになる。

「宗徒」は「むねと」と読む。「ある集団の中で主だった者、中心となる者」という意味で、「宗徒の勇士」とは、「選りすぐった勇士」のことである。ここに出てくる「衛藤」が、衛藤系図や『豊後國志』にある「衛藤國家」とその一族であろう。

先にも触れたとおり、初代豊後守護の大友能直は実際には豊後に下向しておらず、当主として豊後の地に土着したのは第三代の頼泰（よりやす）の代になってからだとされるのが通説だ。『吾妻鏡』には能直が鎌倉や京都で活動し、貞応二年[1223]に京都で没したことが記載されている。ただし、『吾妻鏡』は建久六年の末から三年余りの記録を欠いており、その欠落期間に大友能直が一時的に豊後に下向して緒方一族の残党と戦った可能性はある。

『大分県史 中世篇1』は、承元三年[1209]十二月十一日付の「將軍家政所下文」に「肥後國神蔵庄近部、鳥栖住人左衛門尉藤原能直」とあることに着目し、「(大友能直の) 一時的な西国下向を示しているのではないかと思われる。(中略) 大野九郎討伐の際の豊後国への一時的な下向の可能性を否定することはできないように思われる」と指摘している。

また、仮に能直本人が下向しなくても、一族の者が身代わりとして「能直」を名乗り、大将役を務めた可能性もある。当主自らが陣列の中心にいることにすれば、向背を決めかねている豊後の諸勢力に対して威圧感を与えられるのではなかろうか。それに、能直の弟とされる古庄四郎重吉（重能とも）に率いられた一団は確かに豊後に下向しており、その折には、高崎山や豊後武士団最後の抵抗となった神角寺（じんかくじ）での戦いが行われたようだ。

この戦いについての史料は伝承や後世の文献にしかなく、かつては架空説さえあった。別府大学の渡辺澄夫教授による「大分の歴史辞典」の「神角寺の戦い」の項によると、肥前国松浦党（まつらとう）の石志壺（いしし・さかん）の「石志文書」（承元二年[1208]閏四月十日）の譲状案に、壺が「以前豊後国大野九郎（泰基）の謀反の時、豊後に出征した際に所領を嫡子の潔（きよし）に譲って出発したが、今また改めて譲与する」という趣旨のことが書かれている（『平戸松浦家史料』）。

この古文書が見つかったことで、大野九郎泰基が下向してきた鎌倉勢に抵抗したことが史実だったことが裏付けられた。それも肥前から兵を動員せざるを得ないほど大規模な戦いだったということだ。「神角寺の戦い」として地元には伝わる伝承は、その最後の戦いだ

ったのだろう。大野九郎泰基と大友家との戦いを裏付ける資料がないことを理由に単なる「伝承」であって史実ではないとされていたが、偶然にも資料が見つかって史実と裏付けられた。「大友十二筋」についても伝承であり信じ難いと退けるのは早計であると思う。むしろ、史実ではないことを示す資料の存在があつてこそ、「伝承に過ぎない」と言えるのではなかろうか。その地方に語り継がれていることは、仮にそれを裏付ける資料がなくとも軽視してはならない。

先の大友勢の下向時の人数は総勢二千百人である。豊後に根を張った緒方や大野をはじめとする大神一族に対抗するには、いささか少ないように思われる。兵糧など兵站も十分ではなかったろう。そうした不足を補う必要があつた。動員されたのは肥前だけでなく、おそらく周辺からも大勢の兵が動員されたのだろう。

『豊城世譜』には、承元二年[1208]、杵築の若宮八幡社が荒廃に伴い建て替えが必要となり、大友能直が「老臣」の「衛藤長門三郎國常（えとう・ながと・さぶろう・くにつね）」に社殿の造替を命じたと記載されている。「長門」は「長門守（ながとのかみ）」の略だ。これが史実であれば、佐脇氏が唱えた「建久 [1190～1199] から承久年間 [1219～1222] ごろまでの人物」である「宗長」の孫の右衛門尉宗利（うえもんのじょう・むねとし）が「衛藤」の祖であるとする説は年代的に成立しにくくなる。

「老臣」というからには、主家において重要な地位を占めていたということだろうし、必ずしも老人とは限らないが、それなりの年配ではあつたろう。この國常という人物は衛藤系図には出てこないが、豊後に下向した「國家」とは「國」の字が共通しており、「國」を通字とした同じ一族である可能性はあろう。衛藤系図には、國家が豊後に下向した時は十八歳だったとある。若宮八幡社の造替は、上記の豊後下向を建久七年とすると、それから十二年後であり、國家は三十歳になっている。そうすると、「老臣」國常が國家の子供だとは考えられない。能直の老臣である國常が衛藤の本家筋で、中津留という山間僻地に住まった國家は、日向国境に近い辺境にあつて領土防衛の任に就いたということなのかも知れない。

◆元寇

鎌倉時代、日本は蒙古の二度に及ぶ侵略を受ける。一度目は文永十一年[1274]の「文永の役（ぶんえいのえき）」、二度目は弘安四年[1281]の「弘安の役（こうあんのえき）」という。豊後及び豊前の国守であつた大友家も、戦闘や沿岸の防備のために大いに動員された。

文永の役で元軍の上陸を許してしまった経験に懲りた鎌倉幕府は、再度の来寇に備えて

九州諸国の守護に命じて博多湾岸の防塁を築かせる。総延長二十キョウに及ぶ石積みの防塁は、わずか半年で完成した。『注解 元寇防塁編年史料』（川添昭二著、福岡市教育委員会）によると、大友家は博多湾内の東寄りに位置する香椎浜の防塁築造を担当した。志賀島に上陸した元軍を大友軍が撃退したとの伝承がある。衛藤の一族の中にも筑前での戦いを経験した者がいるかも知れない。

衛藤系図は、國家の後、次のように続く。

輝忠（てるただ、伊豆守、柴北戦において死す。時に五十六歳）——**景平**（かげひら、丹波守）——**平盛**（ひらもり、兵部）——**秀次**（ひでつぐ、権六）——**為景**（ためかげ、左馬介）——**安為**（やすため、童名彦九郎、武功の人なり。頼泰公が太郎左衛門を賜う）——**能道**（よしみち、童名鬼熊丸、後に内蔵介）——**宗教**（むねのり、童名長千代。貞宗公が兵衛尉を賜う）——**忠有**（ただあり、又太郎）——**時忠**（ときただ、四郎兵衛）——**時経**（ときつね、孫三郎）——**時保**（ときやす、左兵衛）——**時定**（ときさだ、平太）——**時友**（ときとも、新七郎）——**時勝**（ときかつ、童名伊三太、後軍八、又兵庫頭、奥嶽合戦討死、三十歳）——**眞氏**（まさうじ、八太郎、日向國於宮崎郡、大友四郎出羽守親隆公、大知忠時戦玉フ、眞氏忠時打、其外首数十六討捕、明応五年[1496]九月政親公十貫文御判賜）——**行次**（ゆきよし、あるいは、ゆきつぐ。丹波守、御所辻合戦討死）——**堅頼**（かたより、平太郎）——**頼重**（よりしげ、右京進）

國家から七代目に当たる安為が、大友頼泰（おおとも・よりやす）と同時代の人物であることは、この割書きからわかる。頼泰は第三代当主であり、正安二年[1300]七月十九日に七十九歳で没している。ちょうど、二度の元寇当時の大友家当主である。

「武功の人」といわれた安為は、どのような「武功」を挙げたのか、何が評価されて頼泰から「太郎左衛門」を賜ったのか、系図からはうかがい知ることができない。また、大友勢の豊後下向から頼泰の死去まで百年余りで、当主が三代なのに対して、衛藤が七代というのは少々多すぎる気がするが、当主の早逝、隠居、養子などの可能性を考えればありうることなのかもしれない。

◆泊寺乱入事件

建武二年[1335]八月二十七日、大野庄下村（現在の豊後大野市大野町）にある泊寺に武士団が乱入して狼藉をはたらく事件が起こっている。「編年大友資料」には、「注進」で始まる「泊寺濫妨人交名注文」が収められている。出典は「志賀親長氏家蔵文書」である。

そこには寺で狼藉をはたらいた二十五人の名前が記されており、衛藤兵衛入道（えと

う・ひょうえ・にゅうどう)と衛藤六(えとう・ろく)の名前がある。そのほかには、藤北、野津、吉野、小河、板井、堀、平野、凶書、曾我などの苗字を持つ名前が並んでいる。奪われたものとして、小袖二、衣二、裏付袴一、大刀一などのほか、馬一疋、牛二頭や、湯瓶一、天目盃二などが挙げられ、「此の外、資材雑具など、これを略す」と記してある。

別府大学の後藤重巳教授が論文「泊寺乱入事件の歴史的背景—内乱期下級武士の動向の一面」でこの事件について考察を行っている。それによると、乱入した者たちの筆頭にある「藤北四郎入道」(ふじきた・しろう・にゅうどう)の藤北氏は、明真という僧侶を祖とする。明真は俗名を能基(よしもと)といい、初代豊後守護職の大友能直の九男で、能直の妻である深妙尼から泊寺院主職を譲られている。この寺を巡っては相続や売却に関する争いごとが文書に残されている。ここで揉め事の詳細には立ち入らないが、乱入事件の背景にはそうした問題があるのかも知れない。

この「衛藤六」と同一人物ではないかと思われる名前が、康暦三年[1380]当時の「豊後直入郷給人注文」に登場する。これは、大友氏の家臣四十四人が直入郷内に与えられていた給地の所有状態を示した文書だ。竹田市史によると、それには「衛藤六」が、三宅名(みやけ・みょう)に「新方十」、平田名(ひらた・みょう)に五の土地を与えられていることが記載されている。

なお、この時代、苗字の次に漢数字一文字が記されているものが散見されるが、「太」一文字の場合も見られることから、「太郎」「次郎」「三郎」の「郎」の文字が省略されているのではなかろうか。「衛藤六」は「衛藤六郎」なのではないかと思う。

◆戦功のこと

衛藤系図によると、衛藤の家の者たちはたびたびの合戦に加わり、討ち死にする者、華々しい手柄を立てて褒賞にあずかる者などさまざまだ。それぞれに文字通り命がけの厳しい人生を送ったことがわかる。「合戦で討死」と割書きがあっても、どの陣営に属して討ち死にしたのかまでは書かれていない。敗れた側にいたのならその後の家は離散、あるいは絶えてしまうこともあるので、衛藤系図の一族はとりあえず家の命脈を保つことに成功したということが言えるのだろう。

衛藤系図には、先に挙げた時保の子である時定(ときさだ、平太)の二人の弟、時持(ときもち、三郎)と安平(やすひら、彌十郎)は、ともに三角畠(みすみばたけ)の乱で討ち死にを遂げたことが記されている。

この変は、応永三十年[1423]に大友十一代親著(ちかつぐ)が家督を従兄弟の持直

(もちなお)に譲ったことに不満をもった親著の長男の孝親(たかちか)が反乱を起こして平定された事件である。時定の子、時友(ときとも、新七郎)の次男、貞家(さだいえ、平八)は、臼杵と津久見の境にある姫嶽で、永享七年[1435]七月から翌年六月にかけて、室町幕府軍の大内持世(おおうち・もちよ)と第十三代大友親綱(おおとも・ちかつな)が、第十二代大友持直(おおとも・もちなお)を攻めた戦いに加わって討ち死にした。時友の長男、時勝(ときかつ、童名伊三太、後に軍八、また兵庫頭)は、三十歳の時に「奥嶽合戦」で討ち死にしたとある。

この「奥嶽合戦」について記している史料が見当たらない。

『緒方町誌』には、大友十八代の親治(ちかはる、?—大永四年[1524])が家督を継いだ明応五年[1496]の九月十七日付「大友親治書」に「奥嶽合戦にて、又五郎、新五郎討死のこと」という記載があることが紹介されている。

しかし、時勝が討ち死にした合戦とは時代が違う。なぜなら時勝の子、眞氏(まさうじ、八太郎)は、大友十四代出羽守親隆(でわのかみ・ちかたか、?—文明二年[1470])の時代の人物であり、両当主の治世は約五十年も隔たっているからだ。奥嶽合戦と呼ばれる合戦が何回かあったと考えるほかない。

大友親隆が日向國宮崎郡に大知忠時(だいち・ただとき)を攻めた際、眞氏は鬼神のごとき働きを見せ、忠時を討ったほか首十六を討ち取る手柄を立てた。また、明応五年[1496]九月に大友第十六代当主の政親(まさちか)から十貫文と御判を賜わっている。

この戦についての資料を見つけられていない。親隆は当主としてはわずか四年ほどだったが、家督を継ぐ前に今の豊後大野市清川町宇田枝に居住したことがあったという。住まいは宝生寺の裏手の小山にあったとされる。その名を「宇田枝館」といった。これは「うたえだ・やかた」と読むより、「うたえだ・たち」と読むべきであろう。今は「古城(ふるじょう)」の地名が残るだけで、館の面影すら留めていない。

『大分・宮崎・愛媛の城郭』(児玉幸多・坪井清足監修、新人物往来社)は次のように記載している。

大友氏十四代親隆は宝徳元年、宇田枝に館を構え、薩軍の侵入に備えた。この館を「御所園」と名づけ、宇田枝衆をはじめ南部衆の武士たちが出仕した。館跡は親隆の菩提寺宝生寺の裏手にある。

南郡に属した衛藤の家の者は親隆の館に「出仕」し、親隆に率いられて日向に攻め込んだものと思われる。

華々しい手柄を立てた眞氏の子、行次(ゆきつぐ、丹波守)は明応五年[1496]、「御所辻合戦」で討死している。

衛藤系図には登場しないが、ほかにも戦功を賞された衛藤がいる。天文元年[1532]、豊

前國妙見岳（みょうけんだけ、現在の宇佐市院内町香下字妙見）で、北九州を支配していた大内氏と大友勢が激突した。『編年大友資料』によると、同年十月から十一月にかけて行われた大規模な戦いだった。大友宗家二十代当主の大友義鑑（おおとも・よしあき、文亀二年[1502]—天文十九年[1550]）が軍忠状（感状）を授けた動員武士の中に、衛藤左衛門尉（えとう・さえ もんのじょう）の名前がある。

この時代の武家社会の慣習として、主君が功績のあった家臣を遇するのに、「偏諱（へんき）を賜う」といって家臣に自分の名前の一字を与えることが行われていた。その許可状を「一字書出（いちじかきだし）」とか「名字書出（みょうじかきだし）」といい、そのうち「加冠（かかん）」と書かれているものを「加冠状」という。

『清川村誌』は、豊後大野市清川町六種字小原の衛藤家に伝わる衛藤文書の「名字書出」「官途書出（かんとかきだし）」を記載している。それによると、大友義鑑（よしあき）は、天文十六年[1547]一月十一日付けで衛藤藤次郎（とうじろう）に、自身の名の一字である「鑑」を含む「鑑忠（あきただ）」の名を授けている。藤次郎はさらにその後、二十一代当主の義鎮（よししげ、後の宗麟、享禄三年[1530]—天正十五年[1587]）から「右近允（うこんのじょう）」という「官途」を受けている。

また、何年のことかは不詳ながら三月二十九日付けで衛藤孫九郎（まごくろう）に「左衛門尉（さえもんのじょう）」の官途が授けられている。前述の大友義鑑から文亀二年[1502]に軍忠状を受けた「衛藤左衛門尉」と同一人物であろうか。

◆大白谷城に拠る

衛藤系図は、頼重の後、以下のように続く。

忠長（ただなが、イ忠太、蔵人）——忠吉（ただよし、長門守）——載行（としゆき、左源太、宇田枝名住）——貞義（さだよし、童名熊太郎、大友義鎮公賜左京進、今般薩州合戦於陣々之手柄、義鎮公蒙御感、御皈陣後、御判物頂戴、其文曰於豊筑間、十町分坪付在別紙 預置候、全可有知行候、恐惶謹言 三月二日 宗麟 御書判 衛藤左京進殿 天正十二（四）薩州責来時、宇田枝與諸士、御嶽杉ヶ城籠持留）——鎮常（しげつね、下野守、筑前国立花鑑載御退治之時、駈向軍功有、宗麟公賜鎮常、初而中津留居住）——鎮種（しげたね、童名代八、後大炊介、宗麟公父賜鎮常、代々鎮之字通字トス）

『清川村誌』には、大白谷（現在の豊後大野市三重町大白谷）の白谷寺屋敷（しろたに・てらやしき）にある三箇の宝篋印塔（ほうきょういんとう）についての記事がある。それによると、塔は、明応元年[1492]、同五年[1496]、文亀二年[1502]に建てられたもの

で、明応元年の塔には施主として「藤原朝臣衛藤家通（ふじわら・あそん・えとう・いえみち）」と彫られているという。衛藤系図には、この家通の名前は見当たらないので、分家なのかも知れない。

衛藤系図の豊後初代である國家が住まった「中津留」は「大白谷」から中津牟礼川に沿って下った所で、距離的に極めて近い場所にある。中津留は現在、豊後大野市三重町に属すが、当時は大野郡緒方郷のうちの宇田枝名（うたえだ・みょう）に属していた。

『豊後國志』巻之九（大野郡）の城砦に関する記述の中に「大白谷城」があり、「緒方郷の大白谷村にあり。また城山という。衛藤蔵人（えとう・くろうど）がこれに城す。代々これに拠る」と書かれている。

衛藤系図の活字本に「蔵人」と官途名が記されている人物としては、「衛藤忠長（えとう・ただなが）」がいる。なぜか書写本には官途の割書きがないが、活字本には忠長の割書きに「蔵人」とあり、ほかに「蔵人」の官途を持つ人物がいないことから、大白谷に城を築いたのは忠長だと考えて間違いなさそうだ。

『豊後國志』巻之九にも衛藤忠長の名前が記載されている。それによると、「蔵人を称す。刑部大丞國家の十九世の孫。永禄中[1558－1570]大白谷山に城を築く。城山（しろやま）と称す。曾孫の左京進貞義（さきょうのしん・さだよし）、その子下野守鎮常（しもつけのかみ・しげつね）等、大友義鎮（宗麟）に仕（つか）う。皆戦功有りという」とある。衛藤系図でも忠長は確かに國家から数えて十九代目に当たっている。『豊後國志』には衛藤忠長の墓についての記載まである。「緒方郷大白（「谷」の脱か）山下に在り。題に曰く、元龜二年[1571]。その館址（やかたあと）は城山下に在り。墓所はそれから去ること半里ばかり」。忠長の没年は元龜二年[1571]とみることができる。

『豊後國志』の大野郡内の山川を紹介する項には「城山」について「傾山の前にあり」として、「永禄中[1558－1570年]、衛藤下野守鎮常（えとう・しもつけのかみ・しげつね）がここに城を築く」とある。

城を築いたのは蔵人なのか鎮常なのか、また、蔵人が築いたのが「大白谷城」で、鎮常は別に「城山」に城を築いたということなのか、これを見る限りは判然としない。

国土地理院発行の地形図（二万五千分の一）「中津留」を見ると、「城山」と名前の付いた山が二か所にある。一つは佐伯市宇目町小野市の「城山」で標高は 602.9 ㍎、もう一つは同町皿内の「城山」で標高は 535.8 ㍎である。

『角川日本地名大辞典 44 大分県』（角川書店）には「城山」の名称が複数ある。その中の一つに、「永禄中、衛藤下野守鎮常ここに城す」との『豊後國志』を引用して「南海部郡宇目町小野市（現在の佐伯市宇目町）にある山。標高 603 ㍎。」と記載されている項がある。地形図「中津留」に載る二つの「城山」の内の「標高 602.9 ㍎」の方を指しているよ

うだ。

しかし、『豊後國志』には衛藤忠長が大白谷に築いた「大白谷城」を「城山」と言うを書いてある。そのうえ『豊後國志』によると、宇目町は緒方郷ではなく宇目郷である。

大白谷から中津牟礼川沿いに遡った「白谷」集落の住民に聞いたところ、「城山」は集落の南に位置する標高約 525 ㍎の山である。地名としては、「白谷」は「大白谷」の中に含まれる字(あざ)であるから、ここが当該の城なのであろう。

この地は日向国境にほど近いことでもあり、鎮常の代に至って初めて城を構えたとは考えにくい。「衛藤蔵人」が構えた城を、鎮常が充実させたということなのかも知れない。衛藤系図は鎮常の割書きに「初めて中津留に居住」と記している。『豊後國志』は衛藤國家が中津留に住んだとしていることとの違いは何だろうか。

◆衛藤尾張守

『筑紫軍記』の「小原鑑元秋月久種を攻め討つの事」という項に「衛藤尾張守(えとう・おわりのかみ)」という人物が出てくる。天文二十一年[1552]、大友第二十一代義鎮(宗麟)は家臣の一人で「肥後國南の関」の城主、小原鑑元を討滅することにし、佐伯紀伊守惟教(さいき・きいのかみ・これのり)、田原近江守親里(たはら・おうみのかみ・ちかさと)を先陣として一万騎で攻めさせた。「寄せ手の内より高橋三河守鑑種(たかはし・みかわのかみ・あきたね) 搦め手より打ち向かいわずかに六十余騎を以て即時に城へ乗込みけり。城主鑑元を三河守が家臣衛藤尾張守引組で討取り勝鬨(かちどき)を揚げにける」とある。

ところが、衛藤尾張守が仕えた高橋三河守鑑種が、大友宗家に叛旗を翻す。北部九州における大友方の有力将だった大宰府・宝満城の高橋は、立花城の立花鑑載(たちばな・あきとし)とともに毛利方の調略に応じて謀叛を起こしたのだ。永禄十一年[1568]七月、大友義鎮(宗麟)は討伐の兵を向けた。

『大友記』によると、立花山に入った毛利方の清水左近将監(しみず・さこんしょうげん)、怡土(いと、福岡県糸島市)の原田親種(はらだ・ちかたね)とともに、高橋鑑種の将として衛藤尾張守(えとう・おわりのかみ)の名前が見える。立花山は大友勢により落城させられた。原田や衛藤尾張守は奪回をはかろうとしたが、同年八月に衛藤尾張守は討死を遂げ、城は大友方が守り通した。大友本家に背いたこの衛藤の家に遺された者たちは、その後、どのような末路をたどったのだろうか。

◆宗麟から「鎮」を賜る

衛藤系図によると、忠長の曾孫にあたる衛藤鎮常(しげつね、下野守)という人物は、衛藤尾張守が巻き込まれた筑前での戦に加わっていたようだ。割書きには「筑前國の立花鑑載を御退治の時、駆け向かい軍功あり。宗麟公が鎮常を賜う」とある。立花鑑載は、永禄八年[1565]と永禄十一年[1568]の二度にわたって宗麟に叛いている。鎮常が手柄を挙げたのが、そのどちらの戦だったのかについては衛藤系図からだけでは分からない。「退治」したというからには、立花鑑載の二度目の叛乱の時であるかも知れない。そうであれば、大友宗家方の衛藤鎮常と、背いた立花・高橋方の衛藤尾張守が相對したということになる。

先に触れた『豊後國志』の記述で、「傾山の前に在り」という「城山」に城を築いたと記されている衛藤下野守鎮常が、この人物である。

衛藤系図には、鎮常の弟に景友(かげとも)という人物がいる。大神一族で豊後佐伯氏十二代当主である佐伯惟教(さいき・これのり)の家臣となって佐伯に居住した。惟教は大友義鎮に謀叛の疑いをかけられたが手向かわずに、弘治三年[1557]五月上旬、四国に亡命した。衛藤系図によると、景友は主人について四国に渡り、「同十月に佐賀関着船」と記されている。それに続けて、「永禄十一年戊辰[1568]十月、毛利元就が九州を攻めた際、四国から佐賀関に渡り、烏帽子嶽之城に戦って武勇を顕(あらわ)し、佐伯皈(帰の旧字)住」と記載されている。「武勇才知有名之士也」とある。この景友の子、彦右衛門教貞(ひこえもん・のりさだ)が、苗字を「衛藤」から「江藤」に改めたと、佐伯地方に伝わっているという。この佐伯惟教という人物は、大友の家運を大きく傾けてしまうきっかけとなった天正六[1578]年の日向・耳川での薩摩との戦いで討死をしている。惟教に仕えた景友も、おそらく大変な苦勞をしたことだろう。

また、『豊後國志』卷之九の「神祠」の項に「稻積明神祠」がある。「緒方郷中津留村の稻積山の下に在り。延暦十七年[798]、国司以て祠を建て奉り、大山祇神(おおやまつみのかみ)と為す。大友氏が代々これを祭る。永禄三年[1560]、衛藤大炊介鎮種(えとう・おおいのすけ・しげたね)がこれを修理する。梁上げの記なお存す」とある。

衛藤系図によると、この鎮種は鎮常の嫡子であり、景友の甥にあたる。

宗麟の時代、大友家は、豊後、筑後、肥後に加え、豊前、筑前、肥前にまで勢力を拡大して全盛期を迎えた。

『増補訂正編年大友史料一五』(田北学編)には、「利根一族共同保管文書」として「大友家臣城主姓氏録」が収められている。大友家に仕えた合計二百三十七人の城主の名前が掲載されており、その中に「衛藤新左衛門尉」(えとう・しんざえもんのじょう)がある。ただし、この新左衛門尉がどの城を守ったのかまでは書かれていない。時期が明示されていないものの、末尾に「右九州之内七州之太守大友殿御家中各皆是一城之主也」(右、九州の内の七州の太守、大友殿御家中にて、それぞれ皆、一城の主なり)と書いてあることか

ら、大友家が北部及び中部九州を支配した宗麟の時代のものであろう。この新左衛門尉は衛藤系図にはいない。

宗麟は、北九州をめぐる大内氏や毛利氏と戦った永禄十二年[1569]の「周防合尾浦の海戦」において、戦功のあった者に北九州の土地を褒美として与えている。『豊後大友氏』（芥川龍男著、戦国史叢書、新人物往来社）によると、恩賞を受けた者の中に「衛藤治部丞（じぶのじょう）両国間五拾町分」「衛藤虎熊（とらくま）両国間拾町分」とあり、ここにも衛藤の名を持つ者が出てくる。ともに居住地は不明だが、前後に記載されている他の氏名にも大野や直入にゆかりのあるとみられるものがあることから、「毛利対策の第一線に新しい家臣団を創り出した」もので、「土豪を近世的家臣団として植えつけた」のだと、同書は指摘している。家臣団のこうした配置も、苗字が各地に伝播していくことにつながったのだろう。

◆御嶽・杉ヶ城

『清川村誌』は、「御嶽社由来略記」と「加藤家系図」を基に、天正十二年[1584]十月の薩摩軍来寇について記載している。それによると、加藤四郎左衛門長房（かとう・しろうざえもん・ながふさ）は宇田枝名の十六人の武士、野武士男女千人、日小田隼人（ひのおだ・はやと）の手勢五十人を引き連れて御嶽の杉ヶ城（すぎがじょう）に立て籠もった。薩摩軍が麓の福野口まで攻め登って来た時、深い霧が御嶽山を覆った。方角を見失った薩摩軍に加藤、布施野、衛藤、日小田の諸勢が襲い掛かって撃退し、城を死守した。

この城の所在地がわからない。衛藤系図、また『清川村誌』が引用している「御嶽社由来略記」や「加藤家系図」には「杉ヶ城」と表記されているが、『豊後国志』には、「御嶽堡」として「緒方郷左右知村にあり。一名杉城」とある。「すぎじょう」と読むのか、「すぎがじょう」と読むのか、字面だけではわからないが、同じ城を指すとみてよいだろう。

「堡」は「ほう」と読み、敵に攻められた時など臨時に詰める戦闘本位の城郭のことだ。『大分・宮崎・愛媛の城郭』には「杉城」、別名「御嶽城」とある。一方、『角川日本地名大辞典 44 大分県』は「高城（別名杉城）」としている。御嶽山から北北東に約四キロの尾根筋に「高城（たかしろ）」という地名があり、同辞典はそこを「杉城（すぎじょう）」とするのだ。

『清川村誌』は、「近郷の高城が砦になっている」として、「中津留の衛藤氏、近郷の首藤氏などが中心になって守ったのであろう」と分析しているが、杉ヶ城との地理関係がわかりにくい。御嶽山は岬々とした岩山であり、とても千人もの人々を収容できたとは思えない。御嶽山をやや下った場所には砦を築けそうな場所があるので、そのあたりに「堡」

を築き、いざという時には山麓一带に住む人々がそこに籠ったものだろう。また、「高城」は杉ヶ城の出城のような存在であったかも知れない。

「天正十二年」の「薩軍来寇」については、『清川村誌』が扱っている二つの文献以外に見つけられないでいる。

『西治録（さいじろく）』という文献が、同年の薩軍来襲に触れてはいる。その記述によると、天正十二年十月上旬、新納武蔵守忠元（にいろ・むさしのかみ・ただもと）に率いられた薩摩の大軍が肥後國に討ち入り、さらに豊後をうかがった。

これに対して岡城の志賀親次（しが・ちかよし）は「浪の原」で薩摩勢を待ち受け、撃退に成功している。この戦いの過程で、御嶽の杉ヶ城の攻防があったのだろうか。しかし、薩摩勢が御嶽に来寇するには、肥後口から岡城を迂回して南下するか、あるいは高千穂口から尾平越えをして奥嶽川沿いに進むか、または日向口から侵入しなければならない。いずれの方面にも城や砦がいくつもあり、御嶽への道筋でそれらの城砦において何らかの攻防があつてしかるべきだろうと思うが、『緒方町誌』には「天正十二年」の薩軍との戦に関する記事はない。あるいは、新納武蔵守が率いた本隊とは別に支隊があつたのかもしれない。

天正十二年ごろの「衛藤」としては、元禄十六年[1703]に刊行された著者不明の「筑紫軍記」という本に「衛藤又右衛門尉」（えとう・またえものじょう）が登場する。それによると、天正十二年暮れ、宗麟は豊後日田郡の兵士千五百余人に命じて、秋月長門守種実の家臣木村甲斐守が守る筑前國の長尾の城を攻めさせた。宗麟に軍奉行として派遣された人物が、衛藤又右衛門尉だ。この人物、いくらか軽率の気味があり、「軍奉行」の身でありながら一騎で城に向かって「城中に上野舎人助と云う者ありや。出でて勝負せよ」と大音声で呼ばれる。何か遺恨でもあつたのかも知れない。ところが、上野が姿を見せると、又右衛門尉は卑怯にも上野に鉄砲を撃ちかけ、しかも仕損じた。怒った上野が鉄砲を構えると、軍奉行を討たせるわけにはいかないとはばかりに寄せ手の一人が又右衛門尉の前に出て上野に撃たれてしまう。この戦は、城方がしぶとく抵抗したため寄せ手は得るところなく撤退した。

◆豊薩戦争

天正十四年[1586]、薩摩軍は日向、肥後の両方面から豊後になだれ込んでくる。薩摩方は事前にかかなりの労力をかけて調略を行っていたらしく、大野・直入の南郡衆から内応する者が相次いだ。

『緒方町誌』によると、菅迫城（すがさこじょう、竹田市川床）の志賀親孝（しが・ち

かたか、道益、岡城主志賀親次の父)、南山城(なんざんじょう、久住町大字白丹字尾登)の志賀鑑隆(しが・あきたか、道雲)、鎧嶽城(よろいがだけじょう、豊後大野市大野町田中北)の戸次鎮連(へつぎ・しげつら、玄三)、鳥屋城(とやじょう、同市朝地町大字鳥屋字城山)の一万田鎮実(いちまんだ・しげざね、宗掇)、山野城(やまのじょう、別名・逆竹城、竹田市久住町大字仏原字市)の朽網鑑康(くたみ・あきやす)と鎮則(しげのり)親子、松牟礼城(まつむれじょう、竹田市直入町大字上田北字浦野)の田北鎮利(たきた・しげとし)、星河城(ほしごうじょう、臼杵市野津町大字垣河内)の柴田紹安(しばた・じょうあん)らが、主家大友氏を見限って島津氏に通じた。柴田紹安は宗麟から見込まれて日向口の備えとして朝日嶽城(あさひだけじょう、佐伯市宇目町大字塩見園)を任されたにも関わらず、あっさり内応して城を明け渡している。

緒方庄のうち鶴ヶ城(つるがじょう、豊後大野市緒方町大字越生)、高尾城(たかおじょう、同市緒方町大字軸丸)、鳥嶽城(からすがたけじょう、同市緒方町大字小原)、俵嶽城(たわらだけじょう、同市緒方町大字小原字堂内)は落城、柏野城(かしわのじょう、同市緒方町大字軸丸字柏野)は和議で明け渡された。こうして、岡城はほとんど丸裸状態と言って良いほどの有り様となった。

この圧倒的な劣勢の中、深入城(ふけじょう、同市緒方町大字上畑)と、杉ヶ嶽城(すぎがたけじょう、同市清川町大字左右知)は城方が死守した。この杉ヶ嶽城は杉ヶ城のことと思われる。

衛藤系図の書写本によると、宗麟からその名「義鎮」の一字「鎮」を賜った鎮常の父である貞義(さだよし、童名熊太郎)は、天正十四年[1586]に薩摩勢が来寇した際に、宇田枝の諸士と御嶽・杉ヶ城に籠った。この時の戦功に対して、大友義鎮から「左京進(さきょうのしん)」の官途と御判物を賜っている。

ところが、活字本はこの戦を「天正十二年」として、「二」の脇にわざわざ「四」と書き添えている。本文に「天正十二年」とあるのを「天正十四年」と訂正をしたものか、あるいは判断がつかないために「四」と脇に書き足したのかも知れない。御嶽・杉ヶ城で薩摩との戦があったことを示すほかの資料が存在する可能性もあるため、今後の取材テーマの一つとしたい。

『緒方町誌』は、深入城の所在地について現在の豊後大野市緒方町大字梅生(うめぎゅう)上にあったとする。それによると、別名「南奥嶽城(みなみおくだけじょう)」と称し、高千穂方面からの島津軍侵入に備えた重要な拠点であった。守将は大友但馬(おおとも・たじま)だったという。その名から大友一族の武将であったことは間違いない。

『緒方町誌』は、この城に立て籠もって島津との攻防戦を戦った諸士を次のように記載している。

工藤、安藤、野仲、衛藤、麻生、加藤、佐藤、吉良、荒巻、佐保、堀、阿南、山村、伊東、上野、渡辺、繁沢、倉橋

ほとんどが現在も緒方周辺に存在する苗字であり、『緒方町誌』も「緒方南部の在地武士、土豪らが抗戦したことが推測される」と分析している。

『大分・宮崎・愛媛の城郭』には、深入城の守勢のうち工藤長左衛門、同忠兵衛、安藤帯刀、衛藤玄蕃介（えとう・げんばのすけ）らが戦死したとある。出典については不明だ。

◆神社仏閣の破却

衛藤のルーツを探す道筋から少々外れるが、御嶽神社に関して『清川村誌』が気になることを指摘しているので紹介する。出典は、加藤家の伝承である。

天正十三年[1585]年正月十四日、進野肥前守（しんの・ひぜんのかみ）が御嶽社頭一宇も残さず焼亡した。宗麟公がキリシタンに入信して豊筑肥の北部九州の神社堂寺を破却したことは耳目を驚かす悪行である。神罰が当たり、大友義統は天正十八年[1590]、朝鮮国で不覚をとり、秀吉に中国へ流され大友は国家を失った。

薩軍から家族や土地を守るために命懸けで戦いはしたものの、多くの領民が昔から信仰してきた神仏に対する宗麟の振る舞いへの怒りが、文面に込められている。社が焼き討ちに遭った際、加藤長房（かとう・ながふさ）は御神躰を仙ノ嶽（せんのかげ）の岩間に隠したという。

『清川村誌』は「御嶽社が宗麟の命によって焼打ちをかけられたのは事実だろう」と分析している。私は、御嶽神社が、来寇した薩摩勢の兵火にかかったのだと思っていたが、まったく違ったようだ。

『中川史料集』も「木原（城原）八幡を御城下勝山に御勧請」との記事の注で、「先年大友家神社破却の時、木原八幡神社も破却せられし故なり」と、大友家による城原八幡宮の破却に触れている。大友義鎮（宗麟）はキリシタン大名として知られている。大友最盛期を築いた宗麟は天正元年[1573]に家督を義統（よしむね）に譲った。かねてキリスト教に関心を抱いていた宗麟は天正六年[1578]、受洗してドン・フランシスコの洗礼名を受けた。隠居したとはいえなおも大きな影響力を持っており、各地の神社仏閣の破却を指図したもののようだ。信仰の証とでも考えたのかも知れない。西国の修験道の一大霊場であった彦山（ひこさん、現在の英彦山）は、大友家に叛旗を翻した秋月と結んだという理由から天正九年[1581]、全山焼き討ちに遭い、堂宇はことごとく破却されたという。天正十年[1582]には大友家の菩提寺である萬寿寺（まんじゅじ）も焼き討ちされた。祖母山の山

頂にあった石祠なども破却されたと言われている。こうした神社仏閣の破却について、宗麟ではなく、家督を継いでいた義統が出したのではないかとの指摘もある。

しかし、『完訳フロイス日本史』（ルイス・フロイス著、松田毅一・川崎桃太訳、中公文庫）には、義統の使者が岡城を訪れて志賀親次に会い、神社仏閣の破却を諫めた場面があることからすると、少し違うのかも知れない。それによると、志賀親次は使者に対して、義統こそ大友家の菩提寺である万寿寺を焼き討ちしたのではないかと反論している。

神社仏閣の破却が、義統の代に行われてはいるが、なおも大きな影響力を行使していた宗麟が命令を下した可能性はある。ただし、直入、大野郡内については、天正十三年〔1584〕に受洗して「ドン・パウロ」の洗礼名を受けていた志賀親次が独断で領内の神社仏閣の破却を指示していたのだろう。

『西治録』によると、岡城の志賀親次の家臣に「進肥前守」の名が見える。御嶽を焼き討ちにした「進野肥前守」と同一人物であるかも知れない。

筑前や肥前、肥後で離反や寝返りが続いたことや、豊後国内部でも有力家臣が相次いで謀叛、離反したことも、また、薩軍来寇の際に大野直入の有力な南郡衆が次々に島津方に内応したのも、宗家当主である宗麟の改宗が家臣団の動揺を招いたのが原因であることは間違いない。薩摩方はその隙を巧みに衝いたとすることができる。

この時代の「衛藤」としては、衛藤系図には登場しないが、『角川日本地名大辞典 44 大分県』の「大野郡清川村」の項に衛藤右馬允（えとう・うまのじょう）がある。「大友家文書録／大友史料 13」を引用して「大友宗麟は衛藤右馬允跡宇田枝名のうち 笠原七十貫文を柴田礼能に預け」たことを記している。

国東地方の大友家臣の中に衛藤の苗字が記された資料がある。「太宰管内志」の「豊後検地記」だ。『続大友史料一』（田北学編、別府大学会発行）によると、その中に大友義統時代の「大友家国東郡士」六十三人の名前が記載されており、「衛藤新左衛門」（えとう・しんざえもん）の名が見える。註に「天正十六、十七年頃の目録也」と記されている。『豊城世譜』には「国東郡中諸士面附」と題された項がある。いつの時代かは定かではないが、大友時代に国東地方に拠った武士たち九十四人の名前が並ぶ中に、「衛藤新左衛門」（えとう・しんざえもん）の名前がある。先の新左衛門と同一人物かも知れない。

このほか、先に引用した『大友家臣団便覧』には、宗麟の時代の家臣として、「国府」の「衛藤美作」（えとう・みまさか）という名前が見える。

◆朝鮮出兵

文禄元年〔1592〕一月五日、豊臣秀吉は諸将に朝鮮出陣を下令した。これを受けて、大友

義統は三月十二日、陸路から肥前・名護屋に出陣した。八十二艘の船で出かけたという説もある。名護屋から朝鮮半島へは海路であることを考えれば、名護屋へも船で出かけた方が合理的に思える。しかし、「八十二」という数字は、源平の戦いで緒方三郎惟栄が源蒲冠者範頼のために用意した兵船の数と同じであり、偶然の一致にしても少々気にかかる。大友家に割り当てられた兵数は六千人だった。

朝鮮に出陣した武士の名簿が大分市の永富家に伝わる永富文書に示されている。「豊後侍著到記」（ぶんござむらい・ちゃくとうき、「著」は「着」の旧字）などと表書きされたこの文書には、七百十一人の武士の名前が記されているという。

『清川村誌』は、その中から大野郡関係を列挙している。

緒方衆

堀次郎、久保治部少輔、植田太郎左衛門尉、加藤助左衛門尉、田尻安芸守、波田野上総介、波田野宮内亮、鶴原孫十郎、鶴原五郎太郎、衛藤源次郎（えとう・げんじろう）、衛藤雅楽助（えとう・うたのすけ）、平井弥太郎、堀式部丞、三代與市、五郡松千代、疋田伊勢熊、阿南九郎、古庄亀若、賀藤讚岐守、久保九郎、長野三郎、藤井作右衛門尉

井田郷衆

小野孫十郎、沓懸左馬助、沓懸勘解由亮

宇田枝衆

首藤次郎太郎、渡辺太郎、進士平三郎、小深田志摩守、衛藤三郎右衛門尉（えとう・さぶろうえものじょう）、進士市進、衛藤勘右衛門尉（えとう・かんえものじょう）、首藤善三郎

野津院衆

木付左馬助、堀民部少輔、波津久主殿介、亀山玄蕃亮、佐久里源亮、波津久主殿、佐土原兵部介、広田大善入道、戸上五郎兵衛、生野九郎、広田源五郎、亀山亀松、佐久里監物介、戸上九郎、亀山右近、亀山孫三郎、戸上左京亮

文禄の役に参加した大友家臣団については、芥川龍男氏が論稿『『豊後国諸侍着到』の復元と伝存事情』で詳しく検討している。それによると、永富文書は末尾に「都合七百四十四人」とあるが、実際には七百二十一人の名前しかなく、福岡県大牟田市の中島輝男氏所蔵「大友家士帳・豊後國諸侍著到、次第不同」、大分県日田市の武内俊雄氏所蔵「豊後國諸侍着到帳・豊後國諸侍着到次第不同」と照合した結果、二ページ分の欠落があることがわかった。

芥川氏がまとめた一覧表では、緒方衆に「原尻藤三郎」が追加されたほか、「古庄亀若」は「古庄亀蔵」とされた。また、宇田枝衆では「進士左京亮」「高山丹波守」が追加された

ほか、「衛藤三郎右衛門尉」は「衛藤三右衛門尉」、「衛藤勘右衛門尉」は「衛藤勘右衛門」となっている。

芥川氏のまとめによると、総数は七百五十五人だという。芥川氏の論稿末尾に一覧表があり、冒頭に大友義統が府内から率いたとみられる三百五十一人の名前が列挙されている。この中に「衛藤（又左衛門）」が見える。また、『豊陽記』には大友義統の手勢百十六騎が記されており、「衛藤又右衛門」（えとう・またえもん）の名前が含まれている。別人か、あるいは「右衛門」と「左衛門」の誤記かも知れない。宗麟が日田郡衆に小原鑑元を攻めさせた際に「軍奉行」として派遣された「又右衛門尉」とは別人であろうか。

一方、『豊城世譜』には、大友支族である杵築城主の木付統直（きつき・むねなお）が一族五人、騎馬三十三騎を率いたと記載されている。その「留守固（るすがため）」の名前一覧の中に「衛藤」が見える。

衛藤系図では、この時代の人物として鎮久（しげひさ、主税介）がいるが、割書きにも朝鮮出兵に加わったとの記載はなく、「著到記」にも名前が見当たらないところをみると参加しなかったのであろう。

朝鮮出兵では文禄二年[1593]に明国と停戦が成立した。この第一次出兵で大友義統が秀吉の不興を買って領地を没収されてしまう。日本と明国の和平は、その条件についての齟齬から破綻し、秀吉が慶長二[1597]年に再度、兵を朝鮮半島に送り込んだ。この時既に豊後は小さく分割されていた。衛藤系図の家が属したのは、岡城に政庁を置く岡領であり、初代領主として中川秀成（なかがわ・ひでなり）が入部していた。

『中川史料集』によると、朝鮮に派遣されたうちの第七陣に「中川修理大夫」（なかがわ・しゅりだゆう、秀成のこと）の名前が見える。「御供」として四十数人の名前があるほかは「総人数千五百人」とあるだけで、註にも「諸子の姓名多く伝わらず」としている。

◆中川氏の竹田入部

中川秀成は、播州三木城から移封された。父は豊臣方と柴田勝家が戦った賤ヶ岳の戦いで討ち死にした中川瀬兵衛清秀（なかがわ・せびょうえ・きよひで）である。嫡子秀政（ひでまさ）が朝鮮出兵中に死亡したため弟の秀成が跡を継ぎ、文禄四年[1595]、家臣団四千人とともに豊後に入る。赤岩で大友旧臣との多少の揉め事があった後、竹田の岡城に入った。

衛藤系図で、この時代の人物を見ると、先の鎮種の後を継いだ鎮久が該当する。系図には以下のように記載されている。

鎮久（主税介、大友義統公、文禄二亥子（マ）五月、於朝鮮國改易、其後御料二成、

御代官太田小源太殿也、文禄四未年、中川修理大夫秀成公、右豊後國於大野直入為七万四千石領主御入部、岡城者志賀小太郎左衛門古城也、赤岩通御入部。竹田邑光西寺に御着、大友家臣等尋為謝舊恩、如蜂起而為及防戦、光西寺要害悪敷ニ依テ、秀成公片ケ瀬村在陣仕玉ヒ、岡城外成圍斗成就シ御移。両郡諸士、被召出御対面、鎮久両郡諸士與共ニ帶甲冑朋勢ヲ引率騎馬ニ而出、中川公馳使而被仰候様者、今度御対面者、武具帶事無用之由被仰出、麻上下ニテ御目見、其後被仰出様者、汝等面々之舊地ニ住シ宰リ、於其村々、以後共ニ可預代官支配由被仰付候、慶長五庚子年、岡城主秀成公、臼杵城主太田飛驒守ヲ責給時、鎮久陣列ニ在)

中川秀成が岡城に入った際に、衛藤鎮久は大野・直入両郡の「諸士」とともに召し出された。甲冑（かっちゅう）を着用して騎乗し郎党を率いて出向いたが、武具を帯びることは無用と言われたために麻上下（あさがみしも）でお目見えし、各自、今後もその村々で代官として預かり支配するよう下令されたという。

『中川史料集』にも同じ場面があり、中川家の視点で「祝いの場であるので甲冑は無用で、麻上下で良いと指示した」とある。

中川家は「郷中旧家系図」を提出するよう領内に指示した。『緒方町誌』には、それに応じた緒方郷の旧大友家臣として次の名前が掲載されている。

吉良助右衛門、足立右衛門、工藤馬之丞、阿南茂助、衛藤藤兵衛（えとう・とうべえ、とうのひょうえ）、首藤清右衛門、工藤孫兵衛、田北新三郎。

この系図を見たいと思い、竹田市などに当たってみたが、伝わっていない模様だ。岡城は明和八年[1771]に大火にあった。『中川史料集』によると、本丸や二ノ丸、三の丸、武器庫などを焼失した。西ノ丸は焼損を免れたらしいが、各家の系図はこの火災で失われたのかも知れない。

◆岡藩の臼杵攻め

関ヶ原の戦いにおいて、全国の大名は徳川の東軍に付くのか、豊臣の西軍に付くのか、旗幟を鮮明にする必要があった。そんな中、朝鮮での失敗を理由に秀吉から領国の豊後を召し上げられた大友義統は、中国の毛利に唆されて旧領を取り返そうと高崎山に兵を挙げた。大友の旧臣で中川家に召し抱えられていた田原近江守親賢入道紹忍（たはら・おうみのかみ・ちかかた・にゅうどう・じょうにん）や宗像掃部鎮次（むなかた・かもん・しげつぐ）などが、中川家の旗を持って大友義統の陣に加わった。この大友方と石垣原（いしがきばる）で戦ったのが、中津の黒田官兵衛孝高（くろだ・かんのひょうえ・よしたか）の軍勢で、中川の旗指物が大友方にあるのを目撃して徳川方に通報する。もともと豊臣恩

顧の大名である中川家だが、肥後の加藤清正の助言で、徳川に異心のないことを証明するため、慶長五年[1600]秋、豊臣方の太田飛騨守（おおた・ひだのかみ）が守る臼杵城に攻め寄せる。

この軍勢の中に衛藤鎮久がいた。衛藤系図には「鎮久陣列ニ在」とある。『中川史料集』によると、この戦に宇田枝（現在の豊後大野市清川町）、緒方の「郷土」の衛藤主税助（ちからのすけ）、加藤四郎左衛門長房入道沢庵（かとう・しろう ざえもん・ながふさ・にゅうどう・たくあん）、布施野弥兵衛（ふせの・やへえ）らが、近邑の「役鉄砲」を率いて参陣している。この主税助が、先の中川氏入部の際に召し出された衛藤鎮久（衛藤系図では主税介）である。

『清川村誌』には、代々、大友家に仕え、大友家退去の後は宇田枝の久保津留（くぼづる）に住んだ衛藤藤兵衛（えとう・とうべえ、とうのひょうえ）が、中川氏に河宇田組（現在の豊後大野市緒方町河宇田）の千石庄屋を言いつかったとある。中川氏の入部後に家系図を藩に提出した人物である。臼杵攻めには中川氏に随って佐賀関陣まで人馬を引き連れて転戦したと記載されている。

この戦で中川方は大将格の重臣を相次いで失う苦戦を強いられた。城方は関ヶ原での豊臣方敗退の報せを受けて開城した。中川氏はこの戦により、かろうじて領地を安堵された。

◆江戸時代

江戸時代に入り、衛藤系図は鎮久の後、次のように続いた。衛藤系図の書写本は鎮盛で終わるが、活字本はさらに二代続き、義重で終わっている。

鎮盛（しげもり、号新助、慶長六辛丑年、中津留千石庄屋ト云役名蒙君命、慶安二己丑年十月内膳正様金子貳百文得飯、承応三年六月二日卒）——**鎮正**（しげまさ、八左衛門、寛永八辛未年三月、千石庄屋相続、中川山城守久清公御領内七万四千石ヲ六十六組二分給、承応三甲午年十二月）——**義重**（よししげ、林之助）

鎮久の子である鎮盛は慶長六年[1601]、中津留村の千石庄屋を命じられている。その子鎮正も寛永八年[1631]、千石庄屋を相続した。衛藤系図は、その子の義重で終わっている。大友義鎮（宗麟）から「名字書出」を給わって後、「鎮」を通字として受け継いでいたが、義重で中断したのはどんな理由からなのだろうか。

『清川村誌』には、どういう文書を基にしたものか、衛藤系図のその後とみられる人物が登場する。それによると、衛藤主税助（鎮久、衛藤系図では主税介）の子、新助（鎮盛か）が慶長六年[1601]に中津留組の千石庄屋を継いだ。さらにその子八左衛門（鎮正か）

が寛永八年[1631]に相続している。これらの相続年と、衛藤系図の鎮盛、その子鎮正がそれぞれ相続した年とが同じであるため、同じ系譜とみて間違いない。鎮正の子九郎大夫（くろうだゆう）が延宝六年[1678]に千石庄屋を相続している。衛藤系図の「義重＝林之助」とは別の子がいたということか、あるいは長じて九郎大夫を名乗ったということであろうか。九郎大夫は元禄十六年[1703]に倉木邑（現在の竹田市）千石庄屋に転出し、その子の久左衛門（きゅうざえもん）が中津留組大庄屋を相続した。その子次郎左衛門（じろうざえもん）は享保十三年[1728]に大庄屋を相続し、苗字御免となった。

当時の大庄屋の相続がどうなっていたのか詳細はわからないが、親が別の土地の大庄屋に転出し、その子が居残って大庄屋を継ぐことがあったようだ。

次郎左衛門の子の六郎兵衛（ろくろうべえ）が宝暦六年[1756]に大庄屋を譲り受けている。その子、七郎介（しちろうすけ）は天明八年[1788]に大庄屋を相続し、やはり名字御免となった。文化三年[1806]、子の栄太郎（えいたろう）が相続したが、文化十年[1813]に「大庄屋役取揚げ」となっている。罷免されたということだろうが、その理由は不明である。

前述の宇田枝組の久保津留から河宇田組の千石庄屋となった衛藤藤兵衛は、天文十六年[1547]に大友義鑑から一字を賜り鑑忠（あきただ）と名乗った衛藤藤次郎とは「藤」を通字とする縁者ではなかろうか。『清川村誌』によると、この衛藤家は藤兵衛の後、右馬丞（うまのじょう）、長兵衛（ちょうべえ）と続き、六郎大夫（ろくろうだゆう）の時の万治三年[1660]に恵良原組（現在の竹田市荻町）の千石庄屋となって転出した。

◆その他

『中川史料集』によると、第四代藩主、中川久恒（なかがわ・ひさつね）は、元禄五年[1692]五月に行われた巖有院（江戸幕府四代将軍徳川家綱）十三回御忌法事に参向する竹内万寿院良尚法親王の御馳走役を幕府に命じられた。「御供並びに御馳走場詰め」の名簿には家老の中川外記（なかがわ・げき）を筆頭に役付の名前がものものしく並んでいる。その終わり近くに「御料理人」として、松永市左衛門と並んで衛藤吉左衛門（えとう・きちざえもん）の名前が見える。

『豊後國志』の編集に参加し、後に南画を大成させた田能村竹田は、衛藤を名乗る家から養子を迎えている。竹田の生涯をまとめた『大分県先哲叢書 田能村竹田』（佐々木剛三監修、宗像健一著、大分県教育委員会、平成五年）によると、竹田は岡藩奥医師の家に生まれて家を継いだ。生まれつき病弱であったため、三十七歳だった文化十年[1813]に隠居が許された。息子太一郎（たいちろう、後に太一）がまだ五歳だったため、恵良村の村

医、衛藤多田介信秀（えとう・ただすけ・のぶひで）の嫡子賢需（けんじゅ、当時四十七歳）を一時養子として迎えた。賢需の実家は弟白需（はくじゅ）が継いだ。

『豊後國志』によると、入田郷と柏原郷にそれぞれ同名の恵良村があるが、どちらだろう。『清川村誌』に出てくる中津留組大庄屋から入田郷・倉木邑大庄屋に転出した九郎太夫とのつながりはないだろうか。あるいはまた、宇田枝組・久保津留から河宇田組の千石庄屋に転出した衛藤藤兵衛の曾孫で、万治三年[1660]に恵良原組の千石庄屋となった六郎太夫の子孫かも知れない。賢需は文政元年[1818]に隠居が許され、太一郎が家督を相続した。

慶応四年[1868]二月十三日、二十人の兵隊が岡を出立した。『中川史料集』によると、「士列」として中川濤太郎をはじめ十人、「小頭」一人、「卒」として九人の名前があり、その卒の中に衛藤小才治（えとう・こさいじ）の名前が含まれている。行先は明示されていないが、岡藩は前年暮れに朝廷から正親町少将（おおぎまち・しょうしょう）邸の警衛に人数を出すよう命じられていることから、この二十人も京都に派遣されたのではないかと思われる。上記二人とも名前だけで、岡藩領のどこに住んだ人物かは定かではない。

◆利仁流後藤氏との関係

『日本の苗字 7000 傑』<http://www.myj7000.jp-biz.net/> というサイトがある。その名の通り日本の苗字について多角的に研究した大変な労作だ。

このサイト表紙の目次にある「苗字順位検索」で「衛藤」（旧字の衛藤では出て来ない）を引くと千百六十四位にあり、「藤原氏利仁流後藤氏族。大分県に圧倒的に多い姓。」とある。そこで「後藤」を引くと三十三位で、「藤原利仁の後裔則明が後藤太と称するに始まる。藤原秀郷流佐藤氏の後裔も。」とある。

それでは、衛藤はいつ後藤から分かれたのか。サイト表紙の目次の「姓氏類別大系」から「藤原利仁流」の「後藤氏」をたぐっていくと、「基清流後藤氏」の中に「後藤忠基」（ごとう・ただもと）という人物がいて、「衛藤」を名乗ったことになっている。

この人物は、有名な戦国武将で播磨国（現在の兵庫県南西部）に生まれた「後藤又兵衛基次」（ごとう・またべえ・もとつぐ、永禄三年 [1560] ～慶長二十年 [1615]）の祖父「純基」（すみもと）の兄弟である。後藤又兵衛の生年から推測すると 1500 年代初めの人物だろう。

フリー百科事典・ウィキペディア「青山・土器山（かわらけやま）の戦い」の項に、播磨の「衛藤忠家」（えとう・ただいえ）という名前が出てくる。上記「衛藤忠基」（えとう・ただもと）の子とされる。それによると、播磨國守護大名、赤松宗家の義祐（よしすけ）に属した黒田官兵衛孝高（くろだ・かんひょうえ・よしたか）の軍と、西播磨の守護代であった龍野の赤松政秀（あかまつ・まさひで）の軍が永禄十二年 [1569] 六月、土器山（現在の瓦山）の麓、土器坂で戦った。激戦の末に赤松政秀方が敗退するが、退却する政秀方にあった衛藤忠家・島津蔵人と四人の弟が取って返して笹峠（現山田峠）で討ち死にしたという。同項には「衛藤家の系図には現地に塚（墓）があると書かれているが、現在は確認できない」とある。播磨衛藤の系図を基にした記述であるようだが、この系図を誰が所蔵しているのかまでは書かれていない。

衛藤系図の信憑性に疑義があるにせよ、さらに衛藤が大友の豊後下向時に随行した家臣団に含まれていたとするいくつかの文献が江戸時代に書かれたものであることを理由に「信用できない」との指摘があるにせよ、既に挙げた通り、元応元年 [1319] の京都の年貢帳にある「衛藤跡」から、衛藤の苗字の始まりが戦国時代よりはるか以前に遡ることは確かだ。また、建武二年 [1335] の泊寺乱入事件の記録、「衛藤六」の名前がある康暦三年 [1380] 当時の「豊後直入郷給人注文」などから、当時既に豊後に衛藤を苗字とする者がいたことも間違いない。さらに、大白谷の白谷寺屋敷にある三箇の宝篋印塔（ほうきょういんとう）のうち、施主として「藤原朝臣衛藤家通（ふじわら・あそん・えとう・いえみ

ち)」と彫られた塔は明応元年[1492]建立であり、後藤忠基が衛藤を称する以前のことであることはほぼ確実だろう。清川の加藤家に伝わる系図に、天正十四年[1586]から翌年にかけての豊薩合戦時、御嶽・杉ヶ城に籠もって薩摩軍を退けた大友方として衛藤の名前が見えることや、豊臣秀吉による文禄元年[1592]の第一次朝鮮征伐の際、大友義統が率いた家臣の名前が記された「豊後侍著到記」(ぶんござむらい・ちゃくとうき)に緒方や宇田枝を含めて五人の衛藤が含まれていることなどから、その当時には大分南部を中心に衛藤が既に根付いていたことは間違いない。

一方、1500年代に後藤氏から分かれた衛藤が豊後に渡ったとする記録は、今のところ見当たらない。岡藩主となった中川秀成は播磨國の三木城から移封されたが、それは単なる偶然であろう。『中川史料集』には、中川秀成に随行した家臣団「約四千人」のうち、主だった約百四十人の名前が記載されている。その中に衛藤の苗字は見えないが「その他」の中に播磨衛藤の者が含まれていた可能性がないとは言えない。しかし、仮に含まれていたとしても、それが豊後衛藤の始まりだとはできない。

以上のことから、基清流後藤氏の系図を根拠として衛藤を「藤原氏利仁流後藤氏族」とすることは誤りである。また、後藤忠基を衛藤の祖とすることも、仮に播磨衛藤に関しては正しいとしても、豊後衛藤については適当ではないと断言できる。後藤忠基が関西あたりにあった衛藤を称する家の養子に入るなど、何らかの関係で衛藤という家の名跡を継いだ可能性はある。仮にそうであるにせよ、大分県南部を中心として県内に広く分布する豊後衛藤とは別系統であるとみるほかはない。

家紋のこと

衛藤が実際に藤原の血筋であるかどうかはともかくとして、藤原の血筋を継ぐ家であることを、その名は主張している。大白谷の白谷寺屋敷跡にある明応元年[1492]に建立された宝篋印塔（ほうきょういんとう）の施主が「藤原朝臣衛藤家通（ふじわら・あそん・えとう・いえみち）」であることから、衛藤の者たちが藤原姓を自覚していたことは間違いない。

一方、私の家の紋は丸の中に二本の横棒が引かれたもので、俗に「せっちん橋」と言われる。厠として地面に掘った穴に足場用に二枚の板を渡した様に見えるためだが、正式には「丸に二つ引両（まるにふたつひきりょう）」と呼ばれる。あまりに単純な形であるので嫌がる人も少なくないそうだが、清和源氏の庶流である足利氏の一門が用いた。京都の足利氏ゆかりの寺院などは、軒瓦などにこの紋所を使用している。藤原の流れであるはずの衛藤が、どうして源氏の紋所を用いることになったのだろうか。

先に挙げた『豊陽志』の「御同紋衆之事」によれば、衛藤は鎌倉から豊後に下向して以降は、大友宗家と同紋の「抱き杏葉」紋の使用を許されていた。臼杵市の多福寺には抱き杏葉の紋を刻した衛藤の墓があり、そのことが事実であったことをうかがわせる。ということは、下向以前は別の家紋を使用していたとみて良いだろう。それがどの家紋かは分からないが、「丸に二つ引き両」紋であったのかも知れない。

今、清川や緒方にある墓地の墓石をみると、衛藤のほかにも、やはり鎌倉から下向したとされる首藤（しゅとう）も同じ「丸に二つ引両」の家紋を使っている。そのほか羽田野（はだの）という苗字にも同様に「丸に二つ引き両」紋を使用する家がある。ところが、同じ衛藤でも清川には「下がり藤」紋を刻した墓石があるほか、大友家に随って豊後に下向した衛藤系図の初代、衛藤國家が住まったとされる中津留にほど近い白谷には、阿蘇神社に由来する「丸に違い鷹の羽」紋が記された衛藤の墓石も見られる。

主家である大友も藤原姓を称した。衛藤の者たちは、大友家に随って豊後に下向したわけで、主家と同じ藤原姓であることを誇っていた筈である。そのうえ下向組の一番に加わったことを賞されて主家の紋の使用が許されたことを名誉に思っていただろう。それが、源氏ゆかりの紋を使用するようになるのには、それなりの理由がある筈だ。

そもそも大友家そのものが、時代によって「姓」を使い分けたようだ。『豊後大友氏の研究』（渡辺澄夫著、第一法規出版）によると、「源姓」は豊後守護代の大友能直に源頼朝（みなもと・よりとも）の庶子との説があるため、「平姓」は外祖父の大友四郎大夫経家（おおとも・しろう・たゆう・つねいえ）が平氏を名乗ったため、「藤原姓」は能直の養父である中原親能（なかはら・ちかよし）が藤原姓であったためだ。大友の家系図の多くも

能直が頼朝の庶子であるとしているというが、通説では否定されているようだ。渡辺氏自身は、能直の実父を古庄（近藤）能成（ふるしょう・よしなり）であるとみている（なお、「大友」も「古庄」も、相模国にある地名に由来する苗字である）。

同著で渡辺氏は、『吾妻鏡』やその他の文献で大友氏が「源姓」を称した記録がないとし、「大友氏が平姓を用いたのは三代頼泰の建長八年〔1256〕九月十二日の安堵条」が初見であることなどから、「北条氏と猶子の関係を結び平姓を許されたものであろう」と分析している。さらに、大友氏が源姓を称するのは「七代氏泰（うじやす）から」であり、「足利尊氏（あしかが・たかうじ）が氏泰を猶子として源姓を賜い、諱名の一字を与えて氏泰と名のらせたことにはじまる」と指摘している。

南北朝時代、北朝方に属した足利尊氏は、南朝方の新田義貞（にった・よしさだ）や楠正成（くすのき・まさしげ）らとしのぎを削り、一時は九州に落ちのびて再起を図ったこともある。豊後の大友家は、はじめこそ南朝方に手を貸すこともあったが、ほぼ一貫して尊氏を支えた。先に記した通り、衛藤には足利氏と同じ清和源氏説もあり、家紋はそのことに由来するのかも知れないが、主家の氏泰が尊氏に許されて源姓を称したことに関係があるのかも知れない。ただし、主家の大友家は最後の当主となる二十二代義統に至るまで「抱き杏葉」紋を使用している。

当時は主君が、功績のあった家臣に自らの家紋や姓の使用を許すことが多くみられた。最終的に足利尊氏が覇権を握って幕府を開くわけだから、勝ち馬に乗った者が「丸に二つ引き両」の使用を許されたという事例が多かっただろうと思われる。

しかし、大友家の家臣であった衛藤は、足利尊氏にとっては陪臣（家臣の家臣）であり、大友家の頭越しにその家臣に家紋の使用を許すというようなことがあったのだろうか。尊氏方の旗印の下に集って戦ったことで、勝手に自家の紋とした可能性もある。また、応仁の乱では、細川に与した有力守護大名の中に大友も含まれていた。細川は丸に二つ引両紋を使用したことで知られる。そうしたことを含めて、さらに検証しなければならない。

丸に二つ引両



足利二つ引両



丸の内に二つ引両



大中黒



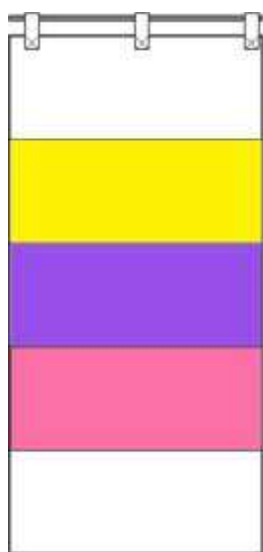
文献によっては、足利氏を使用したのは「足利二つ引両」紋であるとするものもあるほか、「丸の内に二つ引両」紋が足利氏の家紋だと紹介する文献もあって、どれが正しいの

か、少々混乱する。本家と分流庶家などを家紋で区別したのかも知れない。また、褒賞として与えた家紋を使い分けた可能性もあるだろう。



※写真左は足利尊氏の墓がある等持院で「丸に二つ引き両」。右は銀閣寺で「丸の内に二つ引両紋」である（いずれも筆者が撮影した）。

三浦氏の陣幕



足利氏の陣幕



新田氏の陣幕



引両紋の始まりは、戦場で用いられた陣幕だといわれる。これを唱えたのは新井白石だという。その説によると、陣幕は五枚の布を縫い合わせて作られ、足利氏は二番目と四番目の布を黒に、新田氏は上下を白に中の三枚を黒にして縫い合わせた。遠くから見れば二本線が足利氏、太い黒が新田氏と一目で判別できた。新田氏の紋は「大中黒（おおなかぐろ）」と呼ばれる（「一つ引き両」と呼ばれることもあるようだが、中の横線が細いものを言い、大中黒とは区別されているようだ）。

陣幕説を前提にすれば、「丸に二つ引き両」は妥当だが、「足利二つ引両」は二番目と四番目が「白」になっているので、成り立ちからして違うということになるように思われ

る。南北朝時代に一時期劣勢となった足利方のうち、日和見をする者が陣幕の真ん中の白地を黒く塗りつぶして新田方であるかのように偽装することもあったという。そのことからすると、足利二つ引両は白い部分を塗りつぶしてしまうと単なる黒丸になってしまう。そうしたことなどを考え合わせると、足利本流は「足利二つ引両紋」を使用し、支族、傍流の家は「丸に二つ引両紋」あるいは「丸の内に二つ引両紋」を使用したと考えるべきなのかも知れない。

ちなみに「三つ引両」を紋に用いた三浦氏の場合、三浦の「三」の文字にかけて真ん中の布を黄・紫・紅の三色に染め分けた幕を用いた。丸に二つ引両紋を使用した主な足利一族には、山名、畠山、一色、細川、最上、吉良、今川がある。

現代においては、歌舞伎の片岡仁左衛門が「丸に二つ引両紋」を使用している。また、2011年九州場所から大関に昇進した福岡県柳川市出身の関取、琴奨菊（本名：菊次一弘＝きくつぎ・かずひろ）が「丸に二つ引両」の五所紋付（いつつところ・もんつき）の羽織を着ていた。

大友家でも本家と分流庶家で微妙に「杏葉」のデザインが違っている。また、大友家との戦いに勝利した肥前・竜蔵寺家の鍋島氏は、戦勝の記念に「抱き杏葉」紋を家紋としたとされる。しかし、そのデザインは大友家とは微妙に異なる。

抱き杏葉



抱き花杏葉



鍋島杏葉



抱き茗荷



※上のうち左から三つまでは、抱き杏葉の紋の種類で、右端は抱き茗荷紋。大友家に関する文書でさえ大友の家紋を「抱き茗荷」「割り茗荷」とするものがあるが、「杏葉紋」と「茗荷紋」は別物である。「杏葉」紋は字面から植物由来と思われがちだが馬具の一種に由来する。一方、「茗荷」紋は植物由来である。

（文中で使用した家紋、陣幕の画像は、いずれもホームページ「名字と家紋」(column.harimaya.com)より引用した)

◆結びにかえて

衛藤は、全国的にみても大分に偏って存在する苗字だ。なぜなのか。その謎解きをしたくて各種文献を漁ってきた。衛藤の起こりが平安時代の京都においてであるらしいこと、平安時代末期に何らかの関係で源頼朝に仕えはじめたらしいことは、おぼろげながら見えてきたが、それ以上のことは依然としてはっきりしていない。また、衛藤系図の一族が私の先祖であるのかどうかは、今のところ分かっていない。

集めた資料の中でとりわけ興味を覚えたのが『豊後國志』である。卷之九（大野郡）に記載されている人名は、眞名野長者（まなのちょうじゃ）、大神惟基（おおが・これもと）、臼杵惟盛（うすき・これもり）、緒方惟栄（おがた・これよし）、平時重（たいら・ときしげ）、大野泰基（おおの・やすもと）と、郷土史に名だたる人物ばかりが並ぶ中に、衛藤國家があり、衛藤の謂われなどが記載されている。其の後に志賀能郷（しが・よしさと）、志賀泰朝（しが・やすとも）、志賀貞朝（しが・さだとも）、大野基直（おおの・もとなお）、野津頼宗（のつ・よりむね）、戸次重頼（へつぎ・しげより）と続いて、國家の系譜を継ぐ衛藤忠長の名前があり、墳墓の項にも衛藤忠長墓が出てくる。

これまで収集した「衛藤」は豊後一円から一部は豊前、筑前、肥後にまで及ぶが、『豊後國志』卷之一から卷之八まで「衛藤」の名前はただの一度も出てこない。それにも関わらず、卷之九でこれだけ衛藤の者を取り上げるのには、それに相応しい理由がなにかあるはずだ。大友時代に衛藤系図の家はどのような役割を果たしたのだろうか。

今後も引き続き古書店や図書館を回って文献蒐集を行う。参考となりそうな情報を御存知の方がおられたら連絡をくださるようお願いしたい。

平成二十六年[2014]十月四日 文責＝衛藤親（えとう・ちかし）

※「衛藤のこと」に関する御意見、お問い合わせは、奥豊後方言サイト「豊語林（ぶんごりん）」[豊語林 \(biglobe.ne.jp\)](http://biglobe.ne.jp)の表紙の「メール」でお願いいたします。

【参考文献】

- 吾妻鏡（龍肅訳註 岩波文庫）
竹田市史
清川村誌
緒方町誌
大分県朝地町史（竹内理三、八幡一郎監修、原書房）
大分県大野町誌
大分県三重町誌
犬飼町誌
千歳村誌
久住町誌
直入町誌
荻町史
直入郡志
大分県史中世篇
編年大友史料 正和以前（田北学編 富山房）
編年大友史料 自正和二年至正平六年（田北学編 富山房）
中川史料集（北村清士校注 新人物往来社）
豊後大野荘の研究（九州荘園総合研究会編 大分県地方史研究会）
豊後國志（唐橋世濟、二豊文献刊行会 朋文堂）
大友興廢記（大分県郷土史料集成 系図篇 戦記篇(一)）
大友豊筑乱記（戦記史料 歴史図書社）
筑紫軍記 天正鎮西軍記（同上）
大友公御家覚書（同上）
大友記（同上）
西治録（同上）
豊城世譜
両豊記
豊陽志（木付春碩著 安住寺所蔵本）
豊後大友氏（芥川龍男、戦国史叢書9 新人物往来社）
大友宗麟（外山幹夫、人物叢書 吉川弘文館）
源平の雄 緒方三郎惟栄（渡辺澄夫 山口書店）
豊後の武将と合戦（渡辺克己 大分合同新聞社）
豊後大友物語（大分合同新聞社）
豊後大友氏（八木直樹編著、シリーズ・中世西国武士の研究2、戎光祥出版）
大分・宮崎・愛媛の城郭（監修 児玉幸多、坪井清足 新人物往来社）
京都「八条院町」をめぐる諸問題—出土漆器を中心として—（上村和直）

泊寺乱入事件の歴史的背景—内乱期下級武士の動向の一面—（後藤重巳）

大友家臣団便覧（本田耕一）

「豊後国諸侍着到」の復元と伝存事情（芥川龍男）

完訳フロイス日本史（ルイス・フロイス著、松田毅一・川崎桃太訳 中公文庫）

大分県先哲叢書 田能村竹田（佐々木剛三監修、宗像健一著、大分県教育委員会、平成五年）

角川日本地名大辞典 4 4 大分県（角川出版）

有職故実（石村貞吉、嵐義人校訂 講談社学術文庫）

大分の歴史辞典 <http://www.e-obs.com/heo/heohome.htm>

ウィキペディア「青山・土器山の戦い」 [青山・土器山の戦い - Wikipedia](#)

名字と家紋 <http://www.harimaya.com/kamon/column/hiki.html>

日本の苗字 7000 傑 <http://www.myj7000.jp-biz.net/>

姓名分布&ランキング <http://www2.nipponsoft.co.jp/bldoko/index.asp>